近代日本の教育とキリスト教（3）

幕末・明治初期におけるキリスト教系私塾・学校の出現と信仰の自由化

平沢　信康*

Christianity in Modern Japanese Education (3)

Foundation of Christian Private Schools in the late Tokugawa Era and the Early Years of the Meiji Era in Japan

Nobuyasu HIRASAWA*

Abstract

In the middle of the nineteenth century the arrival of Western ships shocked the Japan of the Tokugawa era. They demanded that Japan should' open the country' to provide fuel (coal), food and water for steamboats. In 1858 the Tokugawa Shogunate concluded a treaty with the U.S.A and then concluded similar treaties with other strong Western countries in succession.

As a result of these treaties, several ports were opened to foreign countries and trade began. At the same time, missionaries were sent by Christian sects, mainly from America.

The shogunate carried out a policy that prohibited Christian belief. The new Meiji government followed this policy and continued to suppress Christians.

Regarded as secret agents, missionaries were put under strict observation at the end of the Edo period. Under these circumstances they learnt the Japanese language, and tried to translate the Bible into Japanese.

Some of them were engaged in medical welfare. Others were invited to schools in various places in Japan. They taught adolescents English or science. The missionaries found that young intellectuals in Japan had a strong thirst for knowledge.

This paper describes the foundation of private schools, the social and political background of the acceptance of Christianity into Japan, and the deregulation of the policy of suppressing the Christian belief.

KEY WORDS : *Modern Japanese Education, Christianity, Educational Cultural Excbange*

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan

第1節　宣教師による家塾の開設と学校の出現

キリスト教を東洋諸国に伝えるべく渡来した宣教師は，間接的伝道の一手段として日本の各地に教育機関を設立する。それらはまず外国人居留地に創られ，当初はいずれも私塾ないしは家塾というべき性格のものであった。また小規模な学校も幾つか生まれたが，それらもまた初期においては私塾的な規模・性格を出るものではなかった。宣教師たちは学校や教会を建て，西洋の文化をもたらし，超教派的な協力関係のもとに伝道の情熱に燃えてさまざまな足跡を残した。

「開港場」すなわち，横浜，長崎，神戸といった特殊な地域には，宣教師の経営する家塾が少なからず開かれたが，明治初期まで，その中心は横浜であった。幕末に開港された土地，すなわち下田，函館に加えて神奈川，新潟，兵庫のなかで宣教師の数と働き場所を見ると圧倒的に多かったのは神奈川の代替地とされた横浜であった。その傾向は，明治10年代にその座を東京に明け渡すまで続いた[1]。

江戸幕府の選抜委託生に英学を教えたこともあるヘボンは，横浜移転後，1863（文久3）年5月横浜居留地39番に施療所を開く。彼は主として眼科の治療に優れ，処方の眼薬が有名になっていくが，その手腕は外科内科にも及び，名優沢村田之助の脱疽の手術や義足のあつらえによって広く世に知られ浮世絵にまでなった。そのかたわら，来日から8年後の67（慶応3）年に『和英語林集成』を完成させ，ヘボン式ローマ字を世に広めた（明治5年版が出版されると政府当局も奨励し，わが国法学の父ボアソナードは大学南校へ2千部買い上げさせた）。

ヘボンは新築の自宅を，診療所とともに英学塾に使用した。横浜居留地に開かれたこの塾は，宣教師が日本に開いた家塾の先駆をなすもので，教育家出身の夫人によって主として経営された。ヘボン塾と呼ばれたこの家塾には，のちに政界や実業界で活躍する人たち，すなわち外相となった林董，日銀総裁・蔵相・首相をつとめた高橋是清，三井物産を開いた益田孝，軍医総監となった三宅秀，服部綾雄，沼間守一ら多くの俊秀が学んだ。ヘボン塾は，夫妻が辞書の印刷や休養旅行のため，たびたび海外に出かけ留守がちであったにもかかわらず，タムソン，バラ夫妻，さらにキダーの応援もあって順調な発展を見，その後，築地大学校，東京一致英和学校，さらに明治学院へと発展していった[2]。63年11月に英語塾を開設したヘボン夫人は，翌年いわゆるヘボン会堂で居留地の外国人子女を集めてサンデー・スクールを開いている（わが国における日曜学校のはじめ）。

70（明治3）年末にミス・キダーの家塾が同じ横浜に生まれたので，ヘボン夫人は女子生徒を同塾に委託し，さらに高島嘉右衛門経営の藍謝塾や神奈川県立横浜修文館ができてバラ　Ballagh, J. H. とブラウンが招かれ洋学を教えたため，ヘボン塾は一時衰えた。72年以降，ルーミス，ミラー，グリーンらが来日し，ヘボン塾の講義を受け持つようになると，塾の性格は英学主体から聖書研究重視へ移行していった。71年から高島学校で英語を教えていたバラは，チェリー・アカデミー（土木・商業専攻）卒業後ニュージャージー州の中学校で教えていたニューヨーク市生まれの弟 Ballagh, John Craig を招いた。弟は英語と聖書を教えたが，この学校は1873年に消失し，やがて廃校となった。バラ兄弟からは，岡倉天心，寺内正毅，福羽美静，宮部金吾らが教えを受けている。

日本における最初の独身婦人宣教師であるキダーは，一年新潟に住んだ後，70年9月，ヘボン夫人が63年から経営していた男女共学のヘボン塾を受け継いだ。翌71年9月女子部を分離独立させ，フェリス女学院の基礎を築き，また70年以来横浜で日曜学校も開いた。キダーの学校には，神奈川県令に任ぜられた大江卓が見学に訪れて大きな関心を示し，妻と娘の教育を委託してきた。キダーの学校が充実し，私塾的・片手間的な活動の枠を脱すると，オランダ改革派の事業という性格を明確に持つに至った。しかし，オランダ改革派海外伝道局から資金の出るあてを持たないキダーは，教室について大江に相談し，彼の好意で紅葉坂の日本家屋，机，椅子，通勤用の人力車の無料提供

を受けた。その他の必需品は，生徒が持ち寄り，金を出しあい，人から借りて賄った。こうして，72年９月，大江の助力で野毛山の県庁官舎に移転した。このケースは，後にサラ・スミスが札幌で北海道庁長官から得た援助と類似しているが，日本人の有力者と信頼関係を持ち，その協力を得ることは婦人宣教師の女学校の成功にとって重要なことであった[4]。

ゴーブルは62年春居留地に移り，妻と共に英語塾を営むかたわら，建築業，商館通訳にも携った。彼の生徒には吉田清成，本多庸一らがいる。71年に念願の小会堂を横浜居留地167番に建てたバラは，本格的な英学およびバイブルクラスを開設した。これがバラ塾（山手居留地48番）と称されるもので，彼の説教に多くの青年が感化を受け受洗者があいついだ。のちに日本基督教会牧師で神学者となる植村正久1858.1.15-1925.1.8は J. H. バラの私塾に学んだ一人である。

外国から派遣されてきたキリスト教徒たちのなかには，とくに女子教育に開拓者的役割をはたす者が少なくなかった。

アメリカ婦人一致外国伝道協会は1871（明治４）年６月25日，プライン，P. M.，クロスビー，J. N.，ピアソン，L. H. を日本に派遣した。この団体 Woman's Union Missionary Society of America は，1861年ドリーマス Doremus 夫人によりニューヨークで設立された，異教国への伝道と女子教育を目的とする婦人のみによる超教派の団体である。彼女らは来日要請したバラ，J. H. に横浜で迎えられ，女子教育が一般に顧みられない時代に，山手48番館を借り受けて71年８月28日アメリカン・ミッション・ホーム（横浜共立学園の前身）を創設した。

ホームの総理には，ニューヨークのアルバニー生まれのプライン Pruyn, Mary 1821-1885 が就任し，ピアソンおよびクロスビーと協力して学校活動を始めた。教育者で米国に帰化したフランス人を父に，米国人の母をもつピアソン Pierson, Louise Henrietta 1832.4.7-99.11.28 はニューヨーク州バチスタルに生まれ，バチスタル大学を17歳で卒業し，ピアソンと結婚するが，28歳のとき夫を，さらに４名の子女をあいついで失う苦難のなか，設立間もないアメリカ婦人一致外国伝道協会の運動に参加した女性である。彼女はホームの校長に就任，授業も担当した[5]。ニューヨーク市生まれのクロスビー Crosby, Julia Neilson 1833.7.31-1918.7.4 は，ホームで教鞭を執るほか，庶務・会計の一切を担当した。

静岡から出てきた旧幕府の大儒で，しかも英国で１年半にわたり英学をおさめてきた中村正直 1832.6.24-91.6.7は，３女史の使命感と働きを見聞するにおよび，彼女らの献身に感動して自分の妻と２人の娘を入学させ，しかも社会に対して進んで学校紹介と宣伝の文章を書いている。同年10月，中村の援助を得て発表された「亜米利加婦人教授所告示」という紹介文および生徒募集の文は，わが国初の入学案内ともいうべきものであった。江戸麻布に生まれた中村（敬宇）は，昌平坂学問所で佐藤一斎に就いて漢学・書法を学び，数え年31歳の若さで幕府学問所の御儒者（教授）になるが，また私的に蘭学と英学を修め，66年，幕府の遣英留学生取締として渡英，68年帰国し，維新後，徳川氏に従い静岡に移り学問所教授になった。彼は英国で経験した宗教の社会活動が，新しい日本においても展開しつつあることに対する畏敬と共感を覚えた。ヴィクトリア朝時代の英国の富に驚く一方，障害者や弱者への配慮が社会的に確立されていることに深い感銘を受け，福祉，家庭，婦人などに関心を有していたことも，彼が女子教育に理解を示した背景にある[6]。

当初の生徒は混血児10数名，日本人の少女２，３名であったが，困難を経つつも校勢は次第に伸長した。英国人の娘が２人入学し，やがて長野県北川権令の娘２人，福沢諭吉の娘３人と姪，井上馨の娘２人と徐々に開明的な指導者層にも学校の存在が認められて子女を送るようになり，以後しだいに入学者は増加していった。ドーミトリィーを寄宿舎と訳し，家庭組織を加えた学校も，共立女学校が最初と言われている。教授所には，男子も入学を希望し，午前は男子，午後は女子と分けねばならなかった。静岡バンドの草分けの杉山孫六も当初ここで英学を学んでいる[7]。校舎が手狭

になったため，翌72年10月，山手212番（現在の横浜共立学園の校地）に移転して，校名を日本婦女英学校と改称した。

カトリックでは，65年日本代牧に叙階されたプティジャン，B. T. が横浜に着任して市内北仲通に仏和学校を開き，ついで元治町にフランス語伝習所を設けた。さらに71年に長崎から上海・香港に留学していた日本人神学生のために横浜天主堂に付設の神学校を開き，翌年には，そこに石版印刷所を設けた。禁教令撤廃の８ヵ月前，プティジャン司教の要請によりフランス系のサン・モール修道会のラクロ，M. J. が４名の修道女を連れて横浜に来着，復活後最初の修道院と孤児院を開設した。

ミニモ会司祭のバレにより1662年フランスで創立されたサン・モール修道会は，数名の献身的な女性の協力を得て，貧しい家庭の女児の教育のために小さな学校を始めたのを発端とする。本部がパリのサン・モール街にあったのでこの名があるが，正式名は幼きイエズスの修道会である。やがてフランス全土に広がり，革命の嵐にも耐え，教皇庁直属として海外宣教にも乗り出した。アジアではマレーシアに渡り，教育・福祉事業を始めた。わが国において，はやくも児童福祉的な活動に着手したのは，シンガポールから女子教育と養成のために来日した，この修道女たちであった。

ラクロ　Raclot, Marie Justine 1814.2.9-1911.1.20（修道名サン・マチィルド St. Mathilde）はフランスの貴族の家に生まれ，1832年サンモール修道会に入り35年立誓，52年宣教女としてマレー半島に派遣され，ペナン，シンガポール，マラッカで，孤児院・乳児院・無月謝学校などを設立して貧しい子どもたちのために20年間働いた。72年６月28日，４名の修道女を伴い来日，横浜に上陸した。同行のレヴェスク Levesque, Adelaide 1834-1875.12.12（修道名サン・ノールベル St. Norbert）も，1867年マレーシアに渡り，宣教と孤児の養育に専念していた。日本の土を踏んだ最初の修道女であるこの黒衣の婦人らは，世人から奇異の目でみられながらも，横浜居留地の仮屋で孤児や捨て子の養育を始めた。彼女らの住居は仁慈堂または尼寺の孤児院とも呼ばれた。72年11月には山手83番の地を借り受けて建物を建て，350人の子どもと80人の乳幼児を収容した。

長崎では，フルベッキが済美館・致遠館における教授のかたわら，家塾を開いて英語を教えた。彼の後任者で69年長崎に着任し大徳寺に居を構えたスタウト夫妻も自宅内で夜学を開き，聖書を主な教科書として教えた。72年には夫人が女塾を開き，青年への教育を始めた。72年に広運館を辞したスタウトは，東山手14番の邸内に聖書英語の塾を開き，妻のエリザベス　Stout, Elizabeth G. が女子部を担当した。夫は自宅で夜学校を開いて聖書を教科書として英語を教授，妻は午後の学校を開いて裁縫・編み物を主とした女子教育に従事し，これが長崎市民に喜ばれた[8]。ともにスタウト塾と呼ばれ，のち梅香崎女学校に発展した。

イギリスのプロテスタント宣教師も活動していた。アイルランドに生まれたエンソー（エンソル）Ensor, George 1842-1911.7.13 は，英国教会宣教師（Church Missionary Society 大英教会）より派遣され，1869（明治２）年１月に来日し，長崎に英学稽古所を開いて西洋文化の摂取を目的として集まった日本の知識人を教育しつつ伝道活動を行った。同年二川（小島）一騰に授洗したのをはじめ，かなりの成果をおさめ，禁教下，キリスト教信仰のために捕縛された信徒の釈放運動に努力するなど精力的に活動した。

日米修好通商条約の規定により，1867年に開港場となった兵庫（神戸）でも家塾が幾つかできた。

まず，会衆派系の外国伝道局アメリカン・ボードの宣教師グリーン，D. C. 夫妻が，1870年に神戸に赴任して明治４，５年頃から家塾を設け，デイヴィスが同じ頃家塾を開いた[9]。

アメリカン・ボード American Board of Commissioners for Foreign Missions（ABCFM）は，外国伝道を支援するために1810年６月，米国ニューイングランドにおいて９名の委員 Commissioners によって組織された。委員の内５名はマサチューセッツ州から，４名はコネチカット州から選ばれた。この団体は，アンドーヴァー神学校で学んでいたマサチューセッツ州ウィリアムス大

学の数名の学生が1806年に干草のかげで祈り外国伝道への献身を志したことに由来し，彼らを支援する組織として生まれたものである。当初，この伝道会は主として会衆派教会と結びついていたが，長老派やアメリカ・オランダ改革派教会も参加，さらにバプテスト派の人々もこれに加わり，超教派的性格をもつ合同伝道会 United Missionary Society となり世界的に伝道を展開した。国内のインディアン伝道はもちろん，インド，セイロン，東南アジア，ギリシャ，中近東，アフリカなどに早くから宣教師を送っていた。日本への宣教師派遣は，69年10月ピッツバーグで開かれた第60回年会で決定された。

グリーンがギューリック,O. H.，デーヴィス，J. D.，タルカット，E. らの協力を得て，72年兵庫県宇治野村に学校（神戸教会の創立につながる）を開くにあたっては，三田藩士であった前田泰一1846-84.9.13の力添えもあった。摂津国三田に生まれた前田は慶応義塾に学び福沢諭吉の影響でキリスト教に関心を持ち，72年，三田を訪れた宣教師デーヴィスを知り，彼とグリーンに協力，神戸の宇治野村（下山手通）に英語学校を開くことに助力した。日本で按手礼をうけた最初の牧師で，梅花女学校の創設者となる澤山保羅1852.5.10-1887.3.27も，70年洋学修得のため内海忠勝をたよって神戸に出,グリーンに英語を学んでいる。

ニューヨーク州に生まれ，南北戦争に従軍（中佐）した経歴をもち，ベロイト大学 Beloit College ついでシカゴ神学校を卒業後，71年11月妻と共に来日したデイヴィス Davis, Jerome Dean 1838.1.17-1910.11.4 も神戸で英語学校を開き伝道者養成に当たった。

開港場以外の土地にも学校が生まれつつあった。

1868年に江戸が改称され，翌年遷都があった東京では，築地居留地においてキリスト教主義学校が叢生しはじめる。

1867年（慶応３）年７月，江戸幕府は58（安政５）年の条約に従い築地鉄砲州を外国人の居留地にすることを決定し,江戸市民にその旨布告した。しかし鉄砲州には藩邸と人家が軒を並べていたため建物の立退きに手間どり，明治政府に引き継がれ，70年（明治３）年６月に開設された。はじめ貿易市場として選ばれた築地海岸は，遠浅のため喫水の深い外国船の出入りは困難で，貿易市場としては条件が悪かったため，商人よりも宣教師が多く住むこととなった。立教学院，明治学院，女子学院，青山学院などはすべてこの地に起源を有しており，学校と教会の町として発展した[10]。

69年７月に来日したアメリカ長老派教会派遣のカロザース夫妻 Mr. and Mrs. Carrothers（カラーザーズ，またカロゾロスともいう）は，東京築地６番館に居住し，ここに同年９月家塾（英語私塾）を開いた。妻ジュリア Julia も70年５月，Ａ６番女学校（のちの女子学院）と称する女子英学塾を始めた。夫が同居留地近くに開いていた英学塾に向学の志ある女子生徒が男装して通学していて，ある日，黒板に "I am a girl" と書いたという話を聞いて女学校開設を思い立ったという。夫は72年６月から73年７月まで慶応義塾でも教えた。

明治初期の禁教下に香港やピナンで神学教育を開始したカトリック教会は，日本においても1871（明治４）年以来横浜天主堂で，寄宿制の外国語塾の体裁をとってラテン語やフランス語のほか，漢学などを教授し,神学の予備教育を行っていた。71年夏頃築地居留地に住んだマラン ,J. M. とミドン ,F. N. J. は72年４月，東京番町（現在の千代田区３番町）にラテン学校を設立した。ヴィグール ,F. P. に引率されてマレー半島沖のペナン神学校から帰国した長崎の神学生８名と日本全国から集まった聖職志願者30余名のための設立であった。南部藩家老職の孫に生まれた原敬（幼名健次郎）1856.3.15-1921.11.4は，71年上京，共慣塾に学ぶが学資つづかず，翌年末，カトリック宣教師マランが校長をしているこのラテン学校に転じ，学友16名と共に73年４月12日の聖土曜日にマランから受洗している[11]。

ハリストス正教会では，函館から72年５月東京築地ついで神田駿河台に移ったニコライが，集まった青年有志にロシア語を教授していた。

大阪では,アメリカ聖公会派遣のウィリアムズ，C, M. が62（文久２）年在留英米人の献金による

礼拝堂のチャプレンとなる一方，英学教授を通じて日本人に接触，伝道に努めた。当時の生徒に前島密，大隈重信らがいる。65（慶応1）年，中国と日本の伝道主教に推薦され帰国，翌年10月3日ニューヨークの聖ヨハネ教会で主教に聖別，中国に戻って活動した後，69年11月主教座を武昌から大阪に移して日本布教に主力を注ぎ，中国での経験をふまえてキリスト教教育にも尽力した。

田口伝吉と共に長崎から大阪に出たウィリアムズ主教は，翌70年，日本人のための英語教授の看板を掲げて私塾を創設し，さらに72年2月，モリス，A. R. とともに与力町の礼拝所と無月謝・寄宿制の大阪英和学舎を開設した。同年9月からは禁教下にあってバイブルクラスを開き，翌年2月から聖テモテ学校として正規に開校した[12]。

72年に大阪にアメリカン・ボードから派遣されたギューリックとゴードンも，翌年塾を始めた。

西欧の学問の取り入れ口であった東京を中心として，以後，欧米の学問・文化の移植機関というべき，さまざまな学校や塾が誕生していく。外国語を教えるもの，法律や医学等の専門学を教えるもの，「英数漢」の普通学を教えるもの，そしてキリスト教のミッションに支えられたものなどさまざまな形態の「私学」が展開していく。

これらの学校は「学校制度」の支配をほとんど受けていなかった。維新前後においては，学校体系はほとんど無秩序であった。文部省の創設は1871年（明治4）年である。文部省が学校群を一元的に支配する体制を整えるのは，まだしばらく後の時代である。学校制度に関して，いまだ混沌とし無秩序に近い状態のなかで宣教師たちは私塾もしくは家塾を各地で創っていったのである。

宣教師として派遣された人々が伝道の一方法として，キリスト教精神による教育を行う学校が数多く現れ，この後しだいに発展していった。それらの多くは，欧米の海外伝道協会 Foreign Missions と関係が浅くなく，その初期においてはほとんどがいわゆるミッションと直接的関係に立ち，外国の伝道会・修道会または外国教会の伝道局 Mission Board により人的・財的に経営される学校であった。

第2節　キリスト教受容の背景と土壌

本節では，宣教師に接近しキリスト教を受容していった青年たちの意識と社会的背景を検討したい。

18世紀以来，日本国内では知識人の間における洋学への関心の発展にともない，西欧の学術・文化に関する知識が進み，その基底にあるキリスト教に関心を寄せる識者も現れていった。18-19世紀は，儒教的漢文学習によって蓄積された儒学的とりわけ朱子学的な思惟・思考様式・世界観が，西洋文明や西欧の近代学問との接触を通じて徐々に解体していく過程でもあった。

こうした世界観の転換期にあったこの時期に，若い俊敏な頭脳をもった青年たちの学的関心は，漢学をベースとしながらも，そこから蘭学へ，さらに英学へと，その対象をシフトさせていった。彼らは医学・航海術・軍事科学・天文学・地理学・物理学・数学等の学問を研究することによって，自然科学を儒学的世界観の範疇から解放して理解・研究し，西洋の技術を受容する実学思想を発展させ，それに立脚した知的基盤をつくりあげた。

維新当初における社会状況そのものが必然的に，有為な青年たちを積極的な新知識追求者たらしめたといえる。国家衰弱の原因である「虚学」を捨て，富国強兵に役立つ「実学」を採り入れるべきだとする自覚が強まるなか，新学問への転換を志して宣教師の家塾に学んだ青年の多くは，洋学を学びに横浜等に集まってきた。外国人教師や宣教師たちは，語学や自然科学を中心とする実学を教えるかたわらキリスト教の教えを説いた。初めはキリスト教を学ぶつもりではなかったにもかかわらず，やがて日本の若者のなかには，宣教師たちの熱誠と人格に触れてキリスト教を受け入れていくものが現れた。

多くの日本人が希望したのは，少なくとも当初は，キリスト教そのものではなく，個人あるいは国家の利益と結びついた近代学問であり，近代教育であり，近代文明であった。バラは伝道活動に並行して英語教育を行い，彼のもとには植村や井

深，押川らがいた。本多庸一はバラの寵児であったが，往年を追想して「予等数人の青年は当初は毫も基督教の信者たるべき意なく，唯英語学修のみの為に博士に就きしに，・・・」[13]と語っているように，初めからキリスト教信仰をめざしての接近ではなく語学の習得が目的であった。このように初めは外国語学習，ひいては欧米で蓄積された知の体系や科学の学習が宣教師への接近の目的であった。

その後，士族出身の若き知識青年のなかには，キリスト教宣教師であることを承知の上でその門を叩いて神学を学び，なかには洋学の一種としてキリスト教を研究して進んで入信するに至るものが出現していった。

これらの青年はほとんどみな武士階層の子弟であり，儒教的漢文教育で育った下級士族の出身者が多い。キリスト教に理解を示した青年のなかには，森有礼のように薩摩藩出身の開明派で，積極的な活動を展開して近代日本の指導的グループの一人としてやがて政局の中心に位置するとともに，近代国家建設の担い手となった人物もいたが，その多くは，いわゆる薩長土肥という明治政権の側に立った藩ではない藩，すなわち幕府側についた諸藩の子弟であった。プロテスタンティズム導入の役割を演じたのは主として，薩長出身者で廟堂をかためた明治藩閥新政権のもと，不遇な時代を迎えることを余儀なくされた旧左幕派の諸藩か，もしくは弱小諸藩出身の士族の知識青年たちであった。

代表的な人物を幾人か挙げよう。

江州膳所藩本多家の家臣であった粟津高明 1838.5.22-1880.10.29は，幕末に脱藩して浪士となり各地に周遊，横浜に来てヘボン，バラらについて英語を，さらにキリスト教を学び，1868年4月にバラから受洗した。維新後，海軍兵学寮で英語を教授し，72年4月28日横浜の日本基督公会に転入会した。日本基督教会の最初の牧師となる小川義綏 1833（天保4.1.）-1912.12.19は，武蔵国多摩郡分梅村の農家に生まれ，1863年横浜に出て，2年後アメリカ人宣教師D.タムソン（トムソン）の日本語教師となった。旧約聖書の和訳を手伝ううちにキリスト教に入信，69年2月タムソンから受洗した。

小川の紹介でJ.C.ヘボンの日本語教師として『和英語林集成』第2版の編集を助けた奥野昌綱 1823.5.14（文政6.4.4）-1910（明治43）.12.5は，江戸の下谷徒士町に幕医竹内五右衛門の3男として生まれ（幼名を銀三郎または左京），剣術，槍術を学び，さらに笛，謡曲，小鼓，笙，挿花，書画などを習った。47年奥野家の養子となり，昌綱と改名，49年，輪王寺宮に仕えた。維新の際，上野彰義隊の戦いに敗れて脱走，ヘボンおよびバラの説教に感激して72年8月4日，ブラウンより受洗した。

江戸芝露月町に生まれた植村正久の生家は1500石の旗本であったが，大政奉還とともに没落，帰農して1868年に横浜へ移った。植村は修文館やバラの私塾などに学びながらキリスト教にふれ，73年5月バラより横浜で受洗[14]。

本田庸一 1848.11.18-1912.3.26は津軽藩士八郎左衛門・とも子の長男として陸奥国弘前に生まれ，藩校の稽古館に上がる前から漢籍の素読を学んだ。1865（慶応1）年稽古館司監となる頃には陽明学・蘭学・英学に関心を向け始め，70（明治3）年初めて漢訳聖書に接した。同年秋，藩命により横浜に留学，英学を修めるためバラ塾に入ってキリスト教に出会った。廃藩置県後，再び横浜に自費留学して72年バラから受洗，いわゆる横浜バンドの一員となって房総方面の伝道を分担した。

松山藩士・橋本宅次の子として松山に生まれ（幼名熊三），押川方至の養嗣子となった押川方義 1850.1.17（嘉永2.12.5）-1928（昭和3）.1.10は，1869年東京開成学校に学び，大学南校の貢進生に選ばれたが，71年貢進制が廃止されたために横浜修文館に学んだ。ブラウンやバラの感化を受けて72年3月10日受洗し，「横浜バンド」のメンバーの一人となった。

横浜バンドの1人で明治学院総理となる井深梶之助 1854.7.4-1940.6.24は会津藩士の長男として生まれ，戊辰戦争（1868）において鶴ヶ城篭城に参加して敗戦を経験，学問を通じての薩長への

報復を期して東京に出て勉学したが，S. R. ブラウンを通じてキリスト教の愛敵の精神を知り，73年1月第1日曜日ブラウンから受洗した[15]。

新しい学問・英学を学び，身を立てようと志して横浜に出，さらにキリスト教信仰に至った当時の青年たちは，明治の史家・山路愛山が『現代日本教会史論』で彼らの境遇を指摘したように，維新で瓦解した左幕の藩や幕臣の出身者が多かった。

植村は幕臣の子であり，本多は津軽人であった。津軽藩は態度決定が遅く，勤皇方につけなかったため取り残された。井深は会津人の子である。押川は伊予松山の人で，これも左幕である。役人になるなど明治政権のなかで権力の座に就く望みがほとんどなく，明治社会の政治的リーダーとなっていく条件に恵まれない彼らは，別の道に自分たちの活路を見いださねばならなかった。

太平洋を渡りアメリカへ新天地を求める者も現れた。

江戸赤坂に生まれ静岡で外山正一から英語を学んだ大儀見元一郎 1842.2.21-？は，勝海舟の勧めで神田乃武らとアメリカに渡り，ミシガン州ホウプ・カレッジに入学し，翌年受洗し，のち改革派神学校に学び按手礼を受けた。

1865年の薩摩藩の遣英使節（留学生派遣）に幹部級として参加し，岩倉使節一行の記録掛（三等書記官）をつとめた畑山義成 1840-は，慶応2年6月，森有礼・吉田清成らとアメリカに渡り，ハリス Thomas Lake Harris,1823.5.15-1906.3.23の教団に入った[16]。仙台藩士・新井（常之進）奥邃 1846.5.29-1922.6.16もアメリカへ渡ってハリスの宗教共同体に参加し宗教家となった。

仙台城下元櫓町に生まれ藩校養賢堂に学んだ新井は，藩命により江戸に留学，昌平黌に入り，ついで安井息軒に師事して孟子の講義を聴いた。維新の戦争では五稜郭に篭城したのち江戸へ逃れた。維新政府成立の混乱のなか68年仙台に戻り，玉虫左太夫を助け維新政府に対抗する奥羽越列藩同盟結成画策にあずかるが，同年9月仙台藩が降伏したため，仙台藩士・金成善左衛門1838-1915.1.17らと脱藩，榎本武揚の艦隊に搭乗して函館に赴き，沢辺琢磨と出会い，ニコライを紹介されてキリスト教に接する。69年仙台で榎本軍の兵募集を企て，金成と房州に赴くが，5月榎本降伏により計画頓挫。二人で同年冬に仙台へ短期間戻った後東京に赴き，再度一人で来仙して小野荘五郎・笹川定吉らに会い，「世道人心を維持する」にはキリスト教をもってなすと語り，70年函館に渡ってニコライの留守を預かる沢辺と漢訳聖書を読んでキリスト教を研究。同年10月，彼を追って函館に来た小野とともに仙台に戻って伝道した。

金成は68年5月仙台兵の新潟出陣へ軍監として同行，10月12日陸奥国牡鹿郡折ノ浜から北海道に渡り，榎本武揚軍の陸軍奉行大鳥圭介の添役として行動。69年4月募兵のため函館からドイツ船に僚友新井奥邃とともに便乗し，途中財物を没収され無一文となって仙台に潜入したが，函館が陥落し自訴した。71年6月函館に赴き，旧知の沢辺琢磨を通じてロシア領事館付き司祭ニコライに接し，欧米文化と宗教の大義を聴き，新井と共に五稜郭戦争に破れて前途の希望を失っていた仙台藩士たちに正教を勧め，求道入信者を大量に出すきっかけをつくった。

東京に赴いた新井は，金成の斡旋で米国在留少弁務使森有礼と面談，直ちに随行員に選ばれ，71年（明治3）年12月森有礼に従い横浜を出帆，留学生としてアメリカに渡った。森の指示によりニューヨーク・ブロクトンのハリスのもとに赴き，森が67-68年に過ごした神秘主義者ハリスを枢軸とする新生社（Brotherhood of the New Life）にはいった[17]。

このように，反官軍・反薩長の怨念といった処理しきれない情念や失意をかかえ，激動の時代を生きた挫折派のエリート青年たちにとって，キリスト教は混迷を超える新しい倫理的価値世界として映ったことであろう。徳川封建制の解体は必然的に伝統的な精神的価値体系の崩壊を伴った。

時代は，儒教や武士道といった江戸時代において支配的な士族倫理が瓦解していく，価値体系の転換期・混乱期にあった。士族のキリスト教への入信は，伝統的なエートスとしての武士道の担い手たちの入信にほかならなかった。彼らは価値規

範の異質さよりもむしろ，儒教的・武士道的な禁欲倫理を下敷きにして，宣教師たちの高邁かつ清冽なピューリタン的な人格のうちに武士的道徳の完成を見た形跡がある。

たとえばデイヴィスがそうであったように，植民地時代以来の旧家で，家系的にも精神的にも清教徒の子孫であり，かつ南北戦争に従軍した軍人でもあったアメリカ人の持つ資質に，侍の子たちは武士道のもつ禁欲的倫理にキリスト教を接木しやすかったのであろう。幕末に来日した宣教師の多くは，保守的な信仰をもち高等教育を受け，良きアメリカの宗教的伝統を身につけていた人物であった。

宣教師への接近やキリスト教への入信の動機には，冷酷な現実から逃避して来世を待望する，英語や西洋知識を学んで官職に就く，西洋文明を摂取する，堕落した生活から脱出する，霊的救済を目的とする，といった個人によって幾種もの理由があろうが，舶来の新思想にたいするエキゾチシズムを伴う好奇心もあったことであろう。

大政奉還（67年），廃藩置県（71年），徴兵令制定（72年）など矢つぎばやに断行された国政改新は，武士の名誉心を傷つけかねなかった断髪令や廃刀令を含み，士族階級の生活基盤の急変と全般的な困窮化を伴い不平士族への救済慰撫を必要としたが，反面，これら明治維新で成し遂げた近代的諸改革の成果は「文明開化」と「洋化ムード」を盛り上げていった。

明治維新後の日本社会において，開化思潮は日一日と興隆の道をたどった。鉄道が敷かれ，電線が張られ，衣食住に欧化主義の波が押し寄せて，わが国一切の文物を西洋化すべしといった極論さえ主張された。この気運と対照的な保守的思潮も現れるが，識者の間における進歩的自由主義，一般庶民における文明開化謳歌の傾向はしだいにいかんともしがたい大勢となっていった。知識階級における欧米文化への憧れは大きく，政府当局者においても新知識を求める欲求には熱いものがあった。

居留地には，煉瓦造りの洋館が立ち並び，外人馬車が行き交うエキゾティックな雰囲気のなかで英語学校が誕生してくる。それらが人々に示したのは，ちょんまげ頭の先生が生徒に四書を素読させる光景とは全く別の世界であった。新しい啓蒙的精神，近代的西洋世界の斬新な雰囲気が漂い，ピューリタン的な厳格な道徳・倫理を身につけた宣教師たちが，儒教的教養を身につけた真摯な若い日本人を魅了したことは想像に難くない。新鮮な啓蒙的雰囲気をもった宣教師たちの感化を受けた青年のなかから，明治の啓蒙思想家が幾人も成長していった。

明治初期におけるキリスト教主義学校の成長は，「下から」の洋化ムードによって促進された。「洋化ムード」は，廃藩置県，身分制改革，学制改革などの制度的改革による封建制度・幕藩体制からの解放感と，欧米文化＝実学を摂取することによる新しい社会階層秩序への上昇移動の可能性を誘因として生まれた。つまり，明治初期の近代化を「下から」支えた「洋化ムード」は，実利主義的傾向をもつものであったことも否定できまい。英学を摂取することによって実利的要求を満たすために，欧米文化の出先機関としてのキリスト教主義学校が選ばれ，文明開化の時期に歓迎された[18]。

第3節　禁教令の解除

倒幕後の明治新政府になっても，キリスト教に対する禁教政策は見直されなかった。王政復古を各国に通告し，五箇条の御誓文を告示した政府は，切支丹宗門禁制の高札を永年掲示とした。維新政府は1868年4月7日（慶応4年3月15日）いわゆる五傍の制札の第3札に「きりしたん邪宗門之儀は堅く御制禁たり」（『太政官日誌』6）として，旧幕府の制禁策を踏襲した。これに対して外交団は「締盟せる諸国の信奉する宗教を侮辱する」ものと抗議，太政官は同年5月25日「切支丹宗門之儀」と「邪宗門之儀」の2条に分けて一応の体裁をつくろうが，この年の長崎浦上カトリック信徒約4,000人の逮捕など，政府の方針はむしろ厳刑主義を進めた。

これに加えて，新たなる神道国教化政策がキリスト教弾圧の風潮を強めた。

王政復古の旗幟を掲げた新政府において，精神的指導者をもって自らを任じた復古神道が幕政時代において国教的威力をふるった仏教に対して徹底的な反撃を加えた排仏棄釈を展開したからである。封建的旧勢力たる幕府と密接な関係を結んでいた仏教を打倒することは新政府にとって必要なことではあった。

1868年（慶応4）年，政府は祭政一致の方針に基づき神祇官を再興し，そこに全国の神社・新宮を付属させ，また神社所属の社僧の還俗を命じ，さらに神仏判然令によって仏像を神体とすることを改め，社前の仏像・仏具の取り除きを命じた。この神仏分離政策によって廃仏毀釈運動がひきおこされた。この運動は，仏像・仏具の破壊をはじめ，廃寺措置による寺院の整理統合，僧侶の葬儀執行権要求など，69年10月頃から71年4月頃にかけて全国で激しく展開された。この運動の中心は政府の神祇官僚としての国学者と神官，および地方諸藩の官僚であり，またその指導原理は平田派の国学で，神道の国教化・仏教の抑制のほか，キリスト教の排撃が主張された。

維新政府はこうした神道国教政策を進め，69年神祇官の下に宣教使の職制を定め，いわゆる大教宣布を図った。翌1870年2月，政府は大教宣布の詔勅を出し，翌年9月神祇官を神祇省とし，さらに72年4月これを廃して教部省を置いた。72年9月東京に教導職の教育・統括に当たるとともに，大教宣布運動の指導・推進の中心的機関として大教院が開校され，73年1月に開院式が挙行された。神道と諸宗合併をはかり，神仏が互いに抗争する従来の弊風を一洗し，国教を盛んにして外教たるキリスト教を防御したいとの願い出によったものである。神官・僧侶から学者・講談師までも総動員して神道教化を行おうとした国家的機関であった。各府県では，大寺院を選んで中教院とし，各地に小教院を設置，教導職が巡回説教に当たり，説教に際しては地方行政機関が援助した[19]。

こうして，復古神道による国民の思想統一を天皇絶対制の支柱たらしめるとともに，廃仏毀釈とキリスト教弾圧が全国的に展開され，明治維新後しばらく，わが国宗教界は混乱をきわめた。しかし，復古的で狭隘な平田派の神道は，ますます進歩的で開化的になっていった明治政府にとって，ほどなく不必要な存在となっていき，大教宣布運動にみられる神道国教化政策はアナクロニズムとみなされるに至った。

維新当初，新政府に登用された一部の儒家たちは，そのはじめこそ神道的復古運動に加担したものの，治国平天下思想から開国進取の潮流にのり出さざるをえなかった。維新への変革期に際して，士族階級は新時代において自らの活路を求めるべく鋭意，新興の教化機関・教化力に頼った。新知識追求者は儒教的教養を持ったものがほとんどであった。明治維新当初に関する限り，「笑邪論」（明治2年）の著者鵜飼徹定や「弁妄」（明治6年）の著者安井息軒をはじめ，多くの徹底的な反キリスト教論者があったにせよ，儒教側は神道・仏教に比すればおおむねキリスト教にたいして好意的であった。

思想界における文字どおりの「復古」もおさまっていき，高等教育機関におけるヘゲモニー争いにおいても，やがて洋学派が勝利する。アカデミックな学者社会における洋学派の国学派・漢学派に対する抗争のなか，洋学への関心の高まりを受けて，その背景にある宗教＝キリスト教への接近は自然な移り行きであった。知識人のなかには，やがてキリスト教を理解し，評価しようとする者が現れてくるが，しかし，それは危険を伴うものでもあった。熊本藩出身の幕末の思想家で，実学党の結成に加わった横井小楠のように，68年に新政府へ出仕，徴士・参与となったが，キリスト教に接近したとの理由から，翌年，京都において保守派に暗殺された者もある。彼はキリスト教を西洋の精神原理ととらえ，とくにキリスト教の倫理的側面に着目し，その社会的機能を高く評価していた（儒教的世界観から入信はしなかったが）。

まもなく，信仰を黙認すべきだ，または積極的に信仰の自由を認めるべきだと主張する識者が現れていった。

キリスト教が日本に不測の事態を惹起することを恐れながらも，横浜天主堂事件に逮捕者の即日釈放を令した勝海舟 1823-99は，71年末に「耶蘇

教黙許意見」を発表した。そうした気運のなかで開明的知識人のなかには，この頃，宣教師の説くキリスト教を，希望に満ちた未来につながる文明開化の思想として積極的に受け入れようとする者，すなわち中村正直や森有礼のようにキリスト教信仰の自由を主張するものがあったが，それは急進論であった。

静岡の学問所教授時代にS.スマイルズ『西国立志編』J.S.ミル『自由之理』（71年）を翻訳し，学問所の化学教師クラーク,E.W.のバイブル・クラスに出席して人格的感化を受けた中村は，72（明治５）年８月「泰西人ノ上書ニ擬ス」を草して匿名で発表し「若シ西教ノ禁ヲ除カズンバ，即チ貴国汲々トシテ欧州ノ治化技芸ヲ学ブト雖モ，決シテ真正ノ治化技芸ニ進ムコト能ハズ」と叫び[20]，明治天皇にキリスト教の洗礼を受けるよう勧めた。同年11月，駐米弁理公使の森有礼は三条実美への建言に擬して，英文Religious Freedom in Japan（「日本における信教の自由」）を発表し，キリシタン禁制策に一石を投じた。

聖書和訳は宣教師たちの重大使命であった。ヘボン・バラ・タムソンの３人訳原稿は1868年には脱稿されていた。ヘボンは同年ヨハネ伝の和訳をしており，1870年以前に四福音書を翻訳していた。ゴーブル『摩太福音書』が71年に，翌年秋にはヘボン・ブラウン共訳『馬可（マルコ）福音書』『約翰（ヨハネ）福音書』が刊行された。S.R.ブラウンの助けを得た，いわゆるヘボン訳は，1873年春，馬太（マタイ）伝が出版された[21]。

明治新政府は幕府のキリスト教弾圧政策を踏襲して，69年，外交団の抗議にもかかわらず，長崎のキリシタン3,380名を西日本21藩に配流，なかには拷問を加えて改宗を迫る藩もあり，切支丹宗徒取り調べの際には多少の拷問が行われた。仙台ではハリストス正教会信徒らが弾圧された。

プロテスタントでも獄舎で拷問を受けた者がある。市川栄之助はヘボン訳『馬可伝』などを所持していた理由で妻と共に逮捕された（71年６月30日）。東京芝口芝居町（柴井町）に住み貸本業などを営んでいたが，グリーンと築地ホテルで貸本のことから親しくなって彼の日本語教師となり，70年グリーンに随行して神戸に行きギューリックの日本語教師もつとめた人物である。京都の弾正台出張所に引き渡されて入獄，グリーンは政府に罪状を明確にするよう迫ったが，市川は72年牢死した[22]。

プチジャンが外交団に働きかけて禁教令の解除を運動するなど，キリスト教政策に対して列国からの非難攻撃は激しくなっていった。

こうした時期に，1871年から73年にかけて１年10ヵ月の間，条約改正の下瀬踏みと先進諸国の文物の視察をかねて欧米に岩倉遣外使節が派遣された。この企画は，フルベッキが69年に大隈重信に手交したいわゆるBrief Sketchに端を発している。「信教の自由」その他の理解のために政府高官が直接欧米を視察するよう建白したこの文書は，政争のため，一時お蔵入りしていたが，やがて岩倉使節団の欧米派遣の素案となった[23]。

明治４年の暮れ，岩倉具視を特命全権大使，木戸孝允・大久保利通・伊藤博文・山口尚芳を副使とし，随行員と欧米留学生数十名を加えて，総勢約100名が横浜を出発した。留学生のなかには北海道開拓次官黒田清隆が募集した女子留学生５名が含まれるが，その最年少者は津田梅子（満７歳未満）である[24]。

約２ヵ年にわたり米欧各国を回覧した岩倉使節は，幕末以来の遣外使節の最後にして，また最大規模の派遣であった[25]。一連の修好通商条約は，締結国の治外法権を容認し日本の関税自主権を放棄した，しかも有効期限を定めぬ不平等条約であった。岩倉使節団の目的の一つは，この条約改正にあったが，それに失敗した後も精力的に西欧文物・制度を視察してまわっている。

東洋と西洋の対比は，宗教と文明，あるいは信教の自由といった問題を，否応なしに使節団の課題にせしめた。使節団は，アメリカの文明において果たすキリスト教の大きな役割を認めざるをえなかった。開拓の歴史を支えたアメリカの「紳士」たちが宗教の熱心な信仰者であることに気づかされ，アメリカ開拓の背景に「自由」を求めたプロテスタントの役割を見いだし，いかにキリスト教が彼らの精神生活の強靭不屈なバックボーンに

なっているかを思い知らされたのである。

『米欧回覧実記』の筆者久米邦武は，聖書を「一部高唐ノ談ナルノミ」といい，「瘋癲の譫語」とさえ述べ，教会にみる宗教画に「奇怪」という言葉を投げかけている。だが，東洋の儒教や仏教の「人民ノ実信実行スル所」と比較したとき，「西洋の基督教ト，孰カ深浅ナルヤ」といわざるをえなかった[26]。

条約改正交渉の途にのぼった岩倉使節団一行は，いたるところで日本における迫害を難詰され，この問題の重さを改めて思い知らされた。一行のなかでも意見の対立をみるにいたり，やがて政府を動かしていった。米欧視察に先立つ岩倉使節団と同船帰国したゴーブルは，アメリカ公使デ・ロングの意を受けて，岩倉と随員２名にキリスト教の知識を講義し禁教令撤廃のための布石づくりをした。またこの問題に関して新聞に投書し，またニューヨークで開かれた福音同盟の会に出席して，使節団に対するキリシタン迫害についての抗議と開教要請の決議に一役買った。

ワシントンでの条約改正交渉の際，信教の自由を認めず，キリスト教徒を弾圧するような国とは対等条約の締結はできないとする米国の世論が太政官に伝えられた。翌年，イギリス，フランスに一行が赴いた折も，民衆が使節一行を取り囲んで迫害を難詰，新聞も批判を加えた。こうした欧米の世論に太政官は配流浦上信徒の取扱いを緩和するに至った[27]。

岩倉遣外使節団の欧米における経験や民衆の抗議により，禁制高札のある限り条約改正交渉は不可能であることを悟らされ，交渉中止をアメリカに通告，正院に対して高札の禁令を除くよう建議がなされた。こうした国際世論の前に政府は72年頃から迫害の手を緩め，浦上信徒らの帰村をすすめる一方，翌年1873（明治６）年２月24日，「従来高札之儀ハ一般熟知ノ事ニ付向後取除キ可申事」というきわめて曖昧な太政官布告68号によって，ようやくキリシタン禁制の高札を撤廃することを布達し，実質的に信教の自由を黙認することとなった。これによって，以後キリスト教の布教と伝道は公然と展開されるようになった。

すでに1872（明治５）年３月10日，横浜ではジェイムズ・バラを中心に，当日彼から洗礼を受けた９名を含む11名により，日本で最初の超教派的なプロテスタント教会「日本基督公会」（「横浜公会」現在の横浜海岸教会の前身）が外国人居留地内に設立され（バラが仮牧師に，小川が長老に選ばれた），ようやくそれまでの伝道活動が実を結びはじめていた。

1872年後半から，学制頒布，新橋横浜間の鉄道開業，人身売買禁止，富岡製糸工場開業，太陽暦採用，翌年の仇討ち禁止と矢継ぎ早に政策をうち出していった明治新政府は，「文明開化」というキャッチ・フレーズで「上から」の近代化を進めるため，欧米諸国のキリスト教公認の要求という「外圧」を受け入れざるをえなかった。

10数年の潜伏期を経過した後，西洋の新文明受容の必要性という事情もからんでキリスト教信仰が一応公許されることとなったこの頃から，明治20年代初めにかけて，日本の社会にこの外来の宗教は急速に浸透し，キリスト教系の学校が数多く生まれていくのである。

註

1）高谷道男・岡部一興「横浜と近代日本キリスト教」横浜プロテスタント史研究会編『図説　横浜キリスト教文化史』有隣堂，1992年，13-14頁

2）ヘボンに関する研究書は少なくない。以下に幾つか列挙する。W. E. Griffis, "Hepburn of Japan and His Wife and Helpmates : A Life Story of Tail for Christ", 1913 グリフィス著・高谷道男監・佐々木晃訳『ヘボン―同時代人の見た―』教文館，1991年　高谷道男著・遠藤興一解説『ドクトル・ヘボン』大空社（伝記叢書69），1989年　高谷道男『ヘボン』吉川弘文館（人物叢書〔新装版〕），1986年　やや古いものでは，山本秀『新日本の開拓者　ゼーシー・ヘボン博士』1926年，高谷道男編『ヘボン書簡集』1959年，同『ヘボンの手紙』1976年などがある。

3）当時の生徒は14-17歳が７名，8-10歳が５名。最年長はヘボン塾以来の生徒・奥野昌綱の娘久子，最年少は後の若松賤子（『小公子』の翻訳者）である大川かし。１年後には30名ほどに増えた。鈴木美南子「フェリス女学校」『図説　横浜キリスト教文化史』40頁

4）小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師―来日の背景とその

影響』東京大学出版会　1992年，254-5頁
5）Pierson, L. H. : A Quarter of a Century in the Island Empire or the Progress of a Mission in Japan,1899
6）太田愛人『明治キリスト教の流域　静岡バンドと幕臣たち』，中央公論社（中公文庫），1992年，45-51頁（Ⅰ静岡バンドの人びと　三　御儒者の回心　中村正直）「告示」の全文は同書に紹介されている。
7）太田前掲書，48頁
8）『明治学院百年史』1977年，中屋司馬輔「スタウト博士伝」（『植村正久と其の時代4』1938年，G. D. レーマン著・峠谷新訳『西日本伝道の隠れた源流ヘンリー・スタウトの生涯』1986年
9）『神戸女学院史』1925年，10頁
10）川崎房五郎「築地居留地」『都市紀要』4，1957年　北川千秋『築地明石町今昔』1986年
11）『カトリック神田教会百年のあゆみ』1974年
12）G. M. Fisher "Creative Forces in Japan" London, 1923年　戸川残花「監督ウィリアムス氏」『太陽』1巻7号，1895年　元田作之進『老監督ウィリアムス』1914年　海老沢有道編『立教学院百年史』1974年　同「C. M. ウィリアムズ」，キリスト教学校教育同盟刊『日本キリスト教教育史　人物編』，創文社，1977年
13）横浜山下町の海岸教会にて開催されたバラ在日五十年祝典における祝辞演説　報知新聞　明治44年11月12日　小澤三郎『幕末明治耶蘇教史研究』（旧版1944年・新版1973年，日本基督教団出版局）所収の資料，226-7頁
14）大内三郎「近代日本思想史上の植村正久」『福音と世界』1965年10月　京極純一『植村正久』1966年　藤田治芽『植村正久の福音理解』1981年
15）刊行委員会『井深梶之助とその時代』3巻，1961-71年
16）大久保利謙「岩倉使節派遣の研究」『大久保利謙歴史著作集2　明治国家の形成』，吉川弘文館，1986年，133頁
17）工藤直太郎『新井奥邃の人と思想』（2巻），1984年
18）麻生誠『大学と人材養成』，中央公論社（中公新書221），1970年，115頁
19）西田長男「大教宣布の運動とその神観」『神道史の研究』1943年　辻善之助『明治仏教史の問題』1949年
20）『明治文化全集　思想篇』227-8頁　平塚益徳『日本基督教主義教育文化史』1937年から再引，『平塚益徳著作集　1』教育開発研究所，1985年，15頁
21）小澤前掲書　21-22頁
22）左波亘編『植村正久とその時代』補遺，1941
23）この経緯に関しては大久保利謙「岩倉使節派遣の研究」に詳しい。『大久保利謙歴史著作集2　明治国家の形成』，27-33頁
24）評伝としてよくまとめられている作品に，大庭みな子『津田梅子』朝日新聞社，1993年
25）大久保利謙「岩倉使節派遣の研究」『大久保利謙歴史著作集2　明治国家の形成』，1-7頁
26）久米邦武編・田中彰校注『特命全権大使　米欧回覧実記』岩波書店，岩波文庫（一），1977年，343頁